

Ⅱ. 併設型中高一貫カリキュラムの実践 成果と課題

1. 併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）の開発と成果

齊藤真子

「青年期のキャリア形成」の視点から「併設型中高一貫カリキュラム」（1-2-2-1制）について研究開発した成果の中心にあるのが、平成7年から9年度において本校が研究開発した総合的な学習「総合人間科」であり、その発展的展開を併設型中高一貫カリキュラムの軸としている。

また「併設型中高一貫カリキュラム」（1-2-2-1制）は、中学校から新しく入学する生徒達との「融合カリキュラム」にその特色がある。中学校から新しく入学する生徒達をカリキュラムの中心に位置づけてカリキュラムの核としていることの意義は大きい。

キャリア形成の基になる個性的自立については、大学との連携により「ソーシャルライフ」「選択プロジェクト」「新教科群」（自然と科学、心と身体の科学、国際コミュニケーション学、共生と平和の科学）などの新しい教科・科目や授業方法についての実践的な研究開発をした。

中高六カ年にわたる柔軟な併設型中高一貫カリキュラム（1-2-2-1制）の下で、生徒一人ひとりの「知的好奇心」と「個性的自立」を豊かに育て、様々な生き方をともに学び合うことが将来に向けての自己実現を目指す力の育成となる。まさしく青年期のキャリア形成である。

本併設型中高一貫カリキュラムの実践研究の成果について「新しい中等教育へのメッセージ—ともに学びをつくる—」として出版する。

その他、隣接する総合大学である名古屋大学の各研究科やセンターの教官による最先端の研究内容を学ぶ「学びの杜（もり）」講座の開催や「個別学習アシスト教室」など「大学との連携」による実践研究にも積極的に取り組む。

(1)総合的な学習「総合人間科」を軸とした併設型中高一貫カリキュラムにおける青年期のキャリア形成について

中高六カ年にわたる総合的な学習「総合人間科」を軸とした併設型中高一貫カリキュラムにおける「青年期のキャリア形成」には三つの要素がある。

一つ目は多くの人達との出会いから自分の興味・関心が何かを探る「個性的自立のキャリア」である。二つ目は、自分がどのような「学びのキャリア」を持っている

かを跡づけることである。三つ目は将来の自分の生き方について社会とのかかわりの中で、ともに学び合いながら「生き方キャリア」を考えることである。

キャリア形成は、中高六カ年のゆとりと豊かな学びの中でゆっくりと多面的に形成されていくものであるが、その中心になるのが平成7年度から本校で取り組む総合的な学習「総合人間科」である。六カ年の入口にあたる中学1年生と出口にあたる高校3年生の学年テーマが「生き方」であることの意味は大きい。中学1年生の「生き方」についての学習は、その後の総合人間科の学習の底流として高校3年生の「生き方」につながっていくからである。総合人間科の学習では自分の興味関心から出発し、フィールドワークで社会の中のさまざまな人やものと学び合う。その主体的な学び合いや個性的自立を育てる学習経験とによって、出口にあたる高校3年生において、一人ひとりの生徒が自分自身の将来の「生き方」を自覚的に考えとらえられる力となるのである。

①青年期のキャリア形成について

「キャリア」という言葉は、使われる場面や人によって違う意味を持ち、その解釈には多様性がある言葉である。

本校では、中学校・高等学校におけるキャリア形成について、次のように考えている。

「生徒一人ひとりが、社会におけるさまざまな人やものから、多様で多角的な学び合い方をすることで、個性的自立意識を育みながら進路や生き方などの将来にわたるキャリアの形成意識を持つこと」

②「個性的自立のキャリア」と「学びのキャリア」との関連について

少子高齢化と情報化が進み、豊かで便利な多くのものに囲まれている現代日本のような成熟社会においては、子どもにおける身体的な早熟傾向が指摘される一方で、社会的な自立意識が遅れがちで未熟であるといわれる。子ども達の生活や人間関係の範囲が、学校と家庭の往復であり限られたものとなっているからである。

さて、「自分探し」を始める中学校・高等学校時代において、生徒一人ひとりの精神的・社会的な自立意識が育つためには、中学校から高校にかけての6年間において、どのような「学びのキャリア」を持つこと

がその基盤になるだろうか。

一つ目は教室で人間関係構築スキルを体験的に学び、社会における人と自分の関係を知ることである。二つ目は教科や総合学習における選択・体験などを通して、自分の興味・関心の在り処を知るとともにさまざまな人やものと多角的な学び合いをすることである。

生徒の「学び」の場が学校から社会に広がると、画一的で受け身の知識量を重視する学習から多面的で双方向の問題解決型の学習へと、学び方の質が変化する。そして学びの主体が自分であることと自分の個性が何かについて意識化できることになるのである。お互いに支えあう学びである「学びのキャリア」と「個性的自立のキャリア」の相互作用の中から「自分探し」が始まり「自分づくり」がゆっくりと行われるのである。

③生徒も教師もともに「生き方キャリア」を考える

高校3年生の総合学習「総合人間科」では、自己の個性を知り、主体的に進路を選択する能力や態度である「生き方キャリア」を形成するために、系統別分科会に分かれて各自の進路(職業)研究の発表と情報交換会が行われる。産業・経済の構造的変化や雇用の流動化など大学進学・就職における変化は著しい。そのような現代社会の一員であるとの自覚にたった勤労観・職業観を生徒も教師もともに学び合うのである。生徒一人ひとりが自分の進路実現への意欲を深める時間である。

(2)併設型中高一貫カリキュラム(1-2-2-1制)の系統性について

「併設型中高一貫カリキュラム」の系統性は、次の4点である。

- ①総合人間科における三つの学年テーマ(生き方・生命・平和)をⅠ(中)Ⅱ(高)で繰り返すことで内容における系統性とテーマを深化発展させている。
- ②中2・3の選択プロジェクト(広く浅く)と高1・2の新教科群(狭く深く)では生徒の発達段階を考慮した選択の理念を持ち系統的に発展させている。
- ③人間関係構築スキルを体験的に学ぶソーシャルライフの授業を中学から高校へと生徒の発達段階に応じた系統性のある授業展開をする。
- ④自ら学習計画を立てて学び生き方につながる教科書のない「総合人間科」の学びを中心に新しい教科・科目の学びと既存の教科学習における学びとを、生徒の視点からそれぞれの学び方や学習内容の違いに配慮して配置している。

(3)併設型中高一貫カリキュラムの特色である融合カリキュラムの意義

中学校から1クラス新しく入学する生徒に対する「融合カリキュラム」の持つ意義は次の2点である。

- ①公立中学校から1クラス新しく入学する生徒に対して、附属中学校からの進学生が高校での学びの核になること。とくに「融合カリキュラム」の中心になる「総合人間科」を始め「ソーシャルライフ」や「新教科群」の学習では、附属中学校からの進学生がリーダーとなってお互いに教え合うことで、自らの学びをより深化させることができるのである。
- ②附属中学校からの進学生にとっては、高校から新しく入学してくる生徒達を新しい個性として受け入れることによって、そこでの人間関係や学びが広がる。そこに個性の磨き合いが行われることになる。

併設型中高一貫校としての環境をいかした「融合カリキュラム」で、一人ひとりの個性的自立に向けての学習をカリキュラム化できた。

(4)併設型中高一貫カリキュラムにおける新教科・科目について

①ソーシャルライフ

担任と副担任のTTによって行われるソーシャルライフの授業は「教室で人間関係を学ぶ楽しい授業」として定着している。しかし「道徳との違いは何か」「いつ何の役にたつのか」「いじめの解決になるのか」などの質問に対して明確に今後答えていく必要があるし、保護者の理解までには至っていない。

心理学の知見を背景にして「社会的コンピテンス」を高めるためのソーシャルライフの授業は始まったばかりである。教育現場における一般化に向けて今後どのように発展させていけるか。課題は多い。3年間のさまざまな実践をもとに教室で行うためには、実施時期・授業内容・実施形態などの評価をするとともに、今後は生徒と一緒にソーシャルライフの授業案作りやカリキュラム化を行っていく段階にある。

②選択プロジェクト

中学2・3年生の異学年による少人数クラスの選択授業は、現在9教科11科目が開講されている。生徒に学習意欲があり充実した満足度の高い授業となっている。併設型中高一貫カリキュラムの「個性探求期」にあたり「広く浅く」学ぶことによる個性の探求と異年齢集団による質的な学びの変容は、中学段階の教科における学びの質も変えつつある。今後は高校段階の専門基礎期で生徒がどのように変容するかを検証することになる。

③新教科群

- 高校1年生 「心と身体の科学」 (前期)
- 「自然と科学」 (後期)
- 高校2年生 「国際コミュニケーション学」 (前期)
- 「共生と平和の科学」 (後期)

併設型中高一貫カリキュラムの「専門基礎期」にあたり「狭く深く」学ぶ「新教科群」については、既存の教科や総合学習との違いを比較検討し、学習内容と学習方法を評価する必要がある。また二年間で四つの科目を1回ずつ実践し学習内容作りを終えたばかりの段階である。

学習内容や学習方法についての生徒の評価が高い一方で、複数の教科の先生がクロスカリキュラムで取り組むために、新教科の四つの科目の教材開発と授業案作りにおける先生方の労力は大きいものがある。しかし国際開発センター・保体センター・留学生センター・医学部・農学部などの大学教官による授業参加や協力による新しい科目の授業実践は、今後の高校における教科の再編や新しい科目を作ることにつながる先進的な取り組みとして、また基盤づくりとしての大きな可能性を持つものである。

キャリア形成の三つの要素と併設型中高一貫カリキュラムの関係

